

インフラックス、長崎大

## 藻場を3Dマップ化

再生可能エネルギーベンチャーのインフラックス（東京都港区、星野敦社長）は、水中ドローン（ROV）を使って、海中にある藻場の3Dマップ作成に成功した。長崎大学と共同で開発した。これまでもROVを使った藻場の点検を研究してきたが、水中での制御

が難しいという課題があった。3Dマップを作成することで、藻場の生育状況の把握やブローカーボンクレジットの測定がより正確にできるようになる。

藻場は日光が届く範囲の海底にあり、深いところでは水深20層になる。従来は人が潜って藻場を観察し、生育

状況を確認していた。人海戦術で行うため人手がかかるほか、藻場全体を立体的に把握することも難しかった。

これらの課題を解決する方策の一つがROVだ。インフラックスと長崎大はさらに、潮の流れがある海中でもホバリングが可能で、機体の真下を撮影できるROV「アクアレモナ」を開発。このROVを活用して3Dマップを作成することに成功した。3Dマップによって藻場再生のための作業をより確実に行えるようになる。将来的には藻場の生育が悪い場所などにROVが自動で移動できるよう検討を進める。

インフラックスは洋上風力発電の事業化を目指している。入札の際は地域貢献が重要な評価点になる。藻場再生は漁獲量回復につながるため、洋上風力事業化対象地域の漁業関係者から要望が強い。ROVの制御技術が向上すれば、洋上風力に使う海底ケーブルなどのメンテナンスもしやすくなる。